

## 甘肅省甘南州卓尼県のチベット語方言について —蔵文対応形式から見た扎古録 [Bragkhoglung] 方言の方言特徴—

鈴木博之

### 1 はじめに

本稿では中国甘肅省甘南族自治州卓尼 [Co-ne]<sup>1</sup> 県扎古録 [Brag-khog-lung] 鎮で話される Bragkhoglung 方言の語形式とチベット文語形式（以下「蔵文」）の主要な対応関係を明らかにし、それに基づいて Bragkhoglung 方言のチベット言語学上の特徴を議論する。

#### 1.1 卓尼県のチベット語

卓尼県のチベット語は、中国でチベット語諸方言の調査が開始されて以降注目されてきた。というのも、伝統的にアムドに区分される地域において話される変種はアムドチベット語と呼ばれ、声調の対立を持たないことで知られているが、同じくアムドに分類される卓尼県で話される変種は、声調の対立を持ち、また他のアムドチベット語に見られる音特徴を持たないことが特異とみなされてきたからである。

近年のチベット語方言研究の枠組みでは、卓尼県のチベット語はカムチベット語に属する方言とみなされるのが通例となっている（瞿靄堂(1991, 1995)や Zhang (1996) など)<sup>2</sup>。一方、最近卓尼県とほど近い地域で用いられるチベット語は従来より言われてきた「アムドチベット語」とも「カムチベット語」とも異なる言語群である「ヒャルチベット語」を形成するという考え方が現れてきた (Suzuki 2008)。これにより、従来中国のチベット語の区分が中央・カム・アムドのいわゆる「3大方言」から成ると言われてきた伝統的枠組みから離れて、卓尼県の地理的位置や歴史を考慮しつつヒャルチベット語との関連を議論していく必要がある。しかしその基礎として、卓尼県のチベット語の記述を今一度見直さなければならない。

<sup>1</sup>チベット語に由来する地名は、初出の箇所ではチベット文語形式を [ ] に入れて示す。

<sup>2</sup>しかしながら、チベット語分布域の周縁部で話される同県の方言は、中国の主要なチベット語方言研究の中ではほとんど具体的な例が取り上げられないことがない (格桑居冕・格桑央京 (2002)、江荻 (2002)、張濟川 (2009) など)。

## 1.2 卓尼県のチベット語は1種類か

先述のようにチベット語方言として特殊な環境におかれる卓尼県の方言が、ただ1種の変種から成るものであるのかどうかは、あまり議論されていない。その中で、卓尼県出身のチベット人研究者による母語を含む複数の卓尼県チベット語の変種の記述である rNam-rgyal Tshe-brtan (2008:31-46) によれば、卓尼県のチベット語は大きく4種類に分かれるという。その4種類は以下のようなになる（末尾の地図を参照）。

1. 洮河 [Klu-chu] 北西部（方言地点：完冒 [Wa-dmar] 郷、康多 [Khang-thog] 郷、申藏 [Shing-gtsang] 郷、勺哇 [Sho-ba] 郷、阿子灘 [A-gzigs-thang] 郷）
2. 洮河流域南部（方言地点：尼巴 [Nyin-pa] 郷、刀告 [mDo-khog] 郷、扎古録鎮）
3. 洮河流域沿岸部（方言地点：卡車 [mKhar-chen] 郷、納浪 [gNa'-lug] 郷、柳林 [lCang-tshal] 鎮、木耳 [Mar] 鎮）
4. 洮河東部（方言地点：洮硯郷、藏巴哇 [gTsang-pa-ba] 郷）

このうち1.の変種は、その言語特徴を見る限り、アムドチベット語と考えられる。そのほかが多く先行研究がカムチベット語とみなす変種と考えられる。本稿では資料の不足から、後者にあたる卓尼県に独特のチベット語の系譜を十分に検討することはできないが、可能な範囲で分類の妥当性について検討を加える。なお、本稿で扱う Bragkhoglung 方言は洮河流域南部方言群に分類されている。

## 1.3 本稿で用いる言語資料

本稿で用いる Bragkhoglung 方言の言語資料は、筆者が2011年に北京で行った調査で得られたものである。調査協力者はデカツォ [bDe-skal-mtsho] さん（女性、20代）で、卓尼県扎古録鎮出身である。Bragkhoglung 方言を母語とするが、アムドチベット語<sup>3</sup>も十分な運用能力がある。調査協力者は3年前に北京に来るまで漢語は話せなかったが、北京にいる間に普通話を身につけた。甘南州で通用する土地の漢語（西北官話の一種）は理解しない。学校教育を受けていないため、藏文および漢字の読み書きはほとんどできない。北京に来る以前は故郷を離れたことがないため、20年程度 Bragkhoglung 方言を常時使用する環境にあったといえる。

主に議論の対象とするのは語の引用形式で、そうでない場合は注記する。

<sup>3</sup>甘南州で通用する変種であるが、特定の方言に依拠している発音ではない。アムドチベット語は地域方言が認められるが、アムドチベット語を母語としない人が話す変種は必ずしも特定の地域方言によっていないと考えられる。

## 2 Bragkhoglung 方言の音組織

Bragkhoglung 方言の音組織について、超分節音、母音、子音に分けて提示する。最後に音節構造を示す。

### 超分節音

2 種の声調が認められ、それぞれ語単位にかかる。

ˉ : 語頭が高め

ˊ : 語頭が低め

語頭の高さのみが弁別的に関与し、音節末・語末にかけて下降するか否かは弁別ではなく、複音節語では通常下降するイントネーションが認められる。

### 母音

長短および鼻母音/非鼻母音の対立が存在する。ただしすべての母音がこれらの対立を持つわけではない。また、いくつかの例において鼻母音は非鼻母音と交替する。

i		u	u
e	ə	ə	o
ɛ			ɔ
a	ɐ		ɑ

### 子音

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	t̪ <sup>h</sup>		k <sup>h</sup>	
	無声無気	p	t	t̪		k	ʔ
	有声	b	d	d̪		g	
破擦音	無声有気		ts <sup>h</sup>	t̪s <sup>h</sup>	tɕ <sup>h</sup>		
	無声無気		ts	t̪s	tɕ		
	有声		dz	d̪z	dʒ		
摩擦音	無声有気		s <sup>h</sup>	s̪ <sup>h</sup>	ɕ <sup>h</sup>	x <sup>h</sup>	
	無声無気		ʃ, s	ʃ̪	ɕ	x	h
	有声	v	z	z̪	ʒ	ɣ	f
鼻音	有声	m	n			ŋ	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥	r̥			
半母音	有声	w			j	ɥ	

## 音節構造

音節構造は、鈴木 (2005) を参照して以下のように記述できる。

$${}^cC_1GVC$$

このうち  $C_1$  (主子音) と  $V$  (音節核の母音) が必須である。

最初頭子音  ${}^c$  は前鼻音、前気音の 2 種が現れる。例外として  ${}^w$  も認められる。わたり音  $G$  には  $/w, j/$  がある。よって最大の初頭子音の構造は 3 子音連続となる。

末子音には  $/ŋ, w, j, u/$  がある。  $/ʔ/$  が末子音として現れないことが特筆に値する。

## 3 Bragkhoglung 方言の蔵文との対応関係

rNam-rgyal Tshe-brtan (2008:37-40) には扎古録鎮の方言について言及があるが、具体的な Bragkhoglung 方言の言語資料は含まれていない。また、同論文は音声現象の整理の仕方が西 (1986) や西田 (1987)、張濟川 (2009:259-357) などに提示されるチベット言語学の方法とは異なっている。このため、本節では筆者による一次資料に基づき、Bragkhoglung 方言の特徴をまとめる。

なお、蔵文は Wylie 式の転写で示す。チベット文字の表す音価は格桑居冕・格桑央京 (2004:379-390) を参照。

議論は初頭子音、母音+末子音、声調の 3 種に分けて行う。

### 3.1 初頭子音

#### 3.1.1 閉鎖・破擦・摩擦音の有声性

Bragkhoglung 方言では、閉鎖・破擦音および摩擦音について、蔵文で先行子音 (頭字、前接字) を伴わない有声音基字  $g, j, d, b, dz, zh, z$  は、基本的にそれぞれの調音位置の無声無気音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

'tū <sup>h</sup> ka 「法螺」 ( <i>dung dkar</i> )	'sij 「畑」 ( <i>zhing</i> )
'pi: 「子牛」 ( <i>be'u</i> )	'souq 「牛」 ( <i>zog</i> )

また、これらの文字に足字がある場合も同じく無声無気音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

ˉca 「鶏」 ( <i>bya</i> )	ˉtɕuq 「6」 ( <i>drug</i> )
ˉtɕo 「小麦」 ( <i>gro</i> )	ˉtɕo <sup>h</sup> tɕ <sup>h</sup> ouq 「踊り」 ( <i>bro 'cham</i> )

以上の蔵文有声音字に先行子音が存在するとき、Bragkhoglung 方言では有声音で現れる。たとえば、以下のようなものである。

<sup>ʰ</sup> do 「石」 ( <i>rdo</i> )	<sup>ʰ</sup> dza 「漢族」 ( <i>rgya</i> )
<sup>ʰ</sup> go 「門」 ( <i>sgo</i> )	<sup>ʰ</sup> ga 「愛する」 ( <i>dga'</i> )
<sup>ʰ</sup> be: ja 「蛙」 ( <i>sbal ba</i> )	<sup>ʰ</sup> zə 「4」 ( <i>bzhi</i> )

### 3.1.2 蔵文 sh, zh 対応形式

Bragkhoglung 方言では、基本的にそり舌摩擦音が対応する。たとえば、以下のようなものである。

<sup>ʃ</sup> ha 「肉」 ( <i>sha</i> )	<sup>ʃ</sup> inj 「畑」 ( <i>zhing</i> )
<sup>ʃ</sup> a fio 「母方のおじ」 ( <i>zhang bo</i> )	<sup>ʃ</sup> zə 「4」 ( <i>bzhi</i> )

### 3.1.3 蔵文 c, ch, j 対応形式

Bragkhoglung 方言では、基本的にそり舌破擦音が対応する。たとえば、以下のようなものである。

<sup>ʧ</sup> hu 「水」 ( <i>chu</i> )	<sup>ʧ</sup> si: 「1」 ( <i>gcig</i> )
<sup>ʧ</sup> hə mba 「肝臓」 ( <i>mchin pa</i> )	<sup>ʧ</sup> a 「茶」 ( <i>ja</i> )

### 3.1.4 蔵文足字 y 対応形式

蔵文足字 y 対応形式は大きく蔵文 Py 対応形式と Ky 対応形式に分かれる。

蔵文 Py は、p, ph, b に足字 y を伴う形式を含む形式についていう。Bragkhoglung 方言では基本的に前部硬口蓋摩擦音が対応する。たとえば、以下のようなものである。

<sup>ʧ</sup> a 「鳥」 ( <i>bya</i> )	<sup>ʧ</sup> he 「開ける」 ( <i>phye</i> )
<sup>ʧ</sup> ə xə 「裕福な」 ( <i>phyug po</i> )	<sup>ʧ</sup> ā ku 「狼」 ( <i>spyang khu</i> )

ただし、蔵文 dby は/j/を含む形式に対応する。たとえば<sup>ʧ</sup>ja<sup>ʰ</sup>ka 「暖かい季節」 (*dbyar kha*) など。

一方、蔵文 Ky は、k, kh, g に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式についていう。Bragkhoglung 方言では基本的に前部硬口蓋破擦音が対応する。たとえば、以下のようなものである。

ʼtɕʰə ɣə 「犬」 (*khyi gu*)                      ʰtɕi ʰpo: 「幸せな」 (*skyid po*)  
 ʰdʒe: 「8」 (*brgyad*)

### 3.1.5 藏文足字 r 対応形式

藏文足字 r を含む形式には、Pr (=pr, phr, br を含む形式)、Kr (=kr, khr, gr を含む形式)、tr/dr など閉鎖音を含むもののほか、sr などもある。Bragkhoglung 方言では、Pr, Kr, tr/dr, sr で全く異なる対応関係を示す。

まず、Pr 対応形式についてはそり舌閉鎖音が対応する。たとえば、以下のような。

ʰtɕ ʰtɕʰou ʰ 「踊り」 (*bro 'cham*)                      ʰdɕə 「書く」 (*'bri*)  
 ʰdʒe: 「米」 (*'bras*)                                      ʰtʰo ʰfiu kə 「細い」 (*phra bo*)

ただし、藏文 spr, sbr の組み合わせはそり舌接近音に対応する。

ʰr̥i 「雲」 (*sprin*)                                      ʰra: 「蜜蜂」 (*sbrang*)  
 ʰr̥e 「猿年」 (*sprel*)                                      ʰru: 「蛇」 (*sbrul*)

ただし、例外的に ʰba 「黒テント」 (*sbra*) がある。

Kr 対応形式については、基本的に前部硬口蓋破擦音に対応する。たとえば、以下のような。

ʰtɕʰa ʰtsə 「血」 (*khrag rtsi*)                      ʰdʒa 「行く」 (*'gro*)  
 ʰtɕə mō 「ナイフ」 (*gri ?<sup>4</sup>*)

ただし、藏文 skr の組み合わせは前部硬口蓋摩擦音に対応する。たとえば、以下のような。

ʰɕa 「髪」 (*skra*)                                      ʰɕa 「恐れる」 (*skrag*)

また、中にはそり舌閉鎖音と対応関係を見せる例がある。

ʰtʰə ʰtɕi: 「1万」 (*khri gcig*)                      ʰti ʰma 「影」 (*grib ma*)  
 ʰta ɕʰi 「吉祥」 (*bkra shis*)

<sup>4</sup>藏文形式における ? は、Bragkhoglung 方言の形式に対応する藏文が不明であることを表す。

tr/dr 対応形式については、(ʼ)dr のみが確認されているが、基本的にそり舌閉鎖音が対応する。たとえば、以下のようである。

ˈtɕuŋ 「6」 (*drug*)                      ˈɳdɕe 「鬼」 (*'dre*)

sr 対応形式については、無声そり舌接近音が対応する。たとえば、以下のようである。

ˈr̥ɕ ma 「えんどう豆」 (*sran ma*)              ˈr̥ɕ ʰgu: ka 「薄い」 (*srab ?*)

### 3.1.6 蔵文基字 l, y, 足字 l 対応形式

Bragkhoglung 方言では、基本的に蔵文基字 l、足字 l には /l/ が対応する。たとえば、以下のようである。

ˈloŋ 「道」 (*lam*)                              ˈɳluɯ 「歌」 (*glu*)  
ˈla xa 「手」 (*lag pa*)                        ˈɳla ʰpa 「脳」 (*klad pa*)  
ˈlo ʰtsi: 「年」 (*lo ?*)                        ˈlo ʰrā 「ラプラン寺」 (*bla brang*)

ただし蔵文 zl, sl は歯茎破擦音に対応し、たとえば以下のようである。

ˈɳdza: 「月 (天体)」 (*zla ba*)              ˈɳtse: sə 「到着する」 (*slebs*)  
ˈɳtso: hā 「教える」 (*slob ?*)

一方、蔵文 y には /j/ が対応する。たとえば、以下のようである。

ˈji ɣə 「文字」 (*yi ge*)                      ˈja ʰma 「花椒」 (*g.yer ma*)  
ˈɳjuɯ 「碧玉」 (*g.yu*)

### 3.1.7 蔵文 lh 対応形式

Bragkhoglung 方言では、基本的に歯茎側面摩擦音 /l/ を含む形式が対応し、通常前気音を伴って現れる。たとえば、以下のようである。

ˈɳɬa 「神」 (*lha*)                              ˈɳɬu: sə 「落ちる」 (*lhung ?*)  
ˈɳɬa sʰa 「ラサ」 (*lha sa*)

なお、/l/ は /l̥/ と対立するが、後者の蔵文との対応関係は不明であり、現段階では ˈɳlo ʰdzo: ta: 「沸く」、ˈme: li: 「休む」の2語にのみ認められる。

### 3.1.8 蔵文鼻音字および s+鼻音字を含む形式

蔵文鼻音字は ng, ny, n, m の 4 種があるが、Bragkhoglung 方言には 3 つの調音点しかなく、蔵文 ny, n はいずれも歯茎鼻音に対応する。

ˉna <sup>h</sup> t̚souq 「耳」 ( <i>rna mchog</i> )	˘na 「魚」 ( <i>nya</i> )
ˉna: 「森」 ( <i>nags</i> )	˘na: 「太陽」 ( <i>nyi ma</i> )
˘njũ: 「弟」 ( <i>nu bo</i> )	ˉni: 「2」 ( <i>gnyis</i> )

Bragkhoglung 方言では、蔵文鼻音字に頭字 s を伴う形式には、それぞれ調音位置の対応する有声鼻音に無声前気音が先行して現れる。たとえば、以下のようなものである。

ˉ <sup>h</sup> ma: 「葉」 ( <i>sman</i> )	ˉ <sup>h</sup> nə ma 「竹」 ( <i>smyug ma</i> )
ˉ <sup>h</sup> nə wu 「鼻」 ( <i>sna</i> ?)	˘ <sup>h</sup> ŋa: s <sup>h</sup> ɔ 「前」 ( <i>snga</i> ?)

また、蔵文 m を初頭子音とする語が歯茎鼻音に対応するものがある。たとえば、以下のようなものである。

ˉ <sup>h</sup> ni: 「目」 ( <i>mig</i> )	ˉ <sup>h</sup> nə 「火」 ( <i>me</i> )
˘ni: 「名前」 ( <i>ming</i> )	ˉnə 「人」 ( <i>mi</i> )

これらは古蔵文において my とつづられていた語であり、古蔵文の形式に対応関係を求めることができる。

### 3.1.9 前鼻音を含む子音連続

Bragkhoglung 方言の前鼻音を含む子音連続は、前鼻音要素に後続する子音に無声有気音と有声音があり、それは蔵文前接字 ʼ, m と対応するものが多い。前鼻音要素と後続する子音は、調音位置、有声性についてほぼ一致する。たとえば、以下のようなものである。

ˉ <sup>h</sup> gɔ 「頭」 ( <i>mgo</i> )	˘ <sup>h</sup> θ̚ m̥bo 「高い」 ( <i>mthon bo</i> )
ˉ <sup>h</sup> ɬuq 「龍」 ( <i>'brug</i> )	ˉ <sup>h</sup> t̚s̚ <sup>h</sup> u <sup>h</sup> t̚ɔ 「唇」 ( <i>mchu tho</i> )

### 3.1.10 そのほかの特徴

Bragkhoglung 方言では、以上に述べた以外にも特徴的な音対応がいくつか認められる。



まず、蔵文 ph 対応形式については、無声声門摩擦音が対応する。たとえば、以下のようである。

ˈha: 「ぶた」 (*phag*)                      ˈhu ruuq 「袖」 (*phu ?*)

次に、蔵文 ʼ 対応形式については、声門閉鎖音が対応する。たとえば、以下のようである。

ˈʔā: 「ミルク」 (*'o ma*)                      ʔuu x<sup>h</sup>a 「ふくろう」 (*'ug pa*)

加えて、蔵文 w 対応形式については、一例のみ確認しているが、以下のように唇歯摩擦音をもつ変異が認められる。

ˈwva / ˈ<sup>h</sup>wa 「狐」 (*wa*)

### 3.2 母音および母音+末子音

語末位置における基本的な対応関係は以下のように示すことができる。ただし、蔵文再添後字 s は口語形式に明確な対応関係を得られないため、以下の表では省略する。また、いくつかの対応形式は不明であるため、空白にしてある<sup>5</sup>。

V\C	# / ʼ	b	d	g	m	n	ng	r	l	s
a	a	ɔw	ej	ɑ:	oŋ	a:	ɑ: / ɔ̃ / ǎ	ə / a	a:	e:
i	ə	i:	i:	i:	əŋ	ĩ	iŋ / ĩ			
u	uu	ow	i:	uuq		ẽ	u:		uu: / ø:	uu: / i:
e	e / ə		ej	ɑ:	aŋ	ã / ẽ		ə		ej
o	o / ɔ	əw / ɔ:	ej	ouq / o:	oŋ / ɔ̃	ẽ	o: / ɔ̃		ø:	ej

基本的な傾向として、蔵文で開音節のものは短母音と対応し、末子音字が鼻音の場合は鼻母音、それ以外の末子音字の場合は長母音もしくはわたり音を含んだ母音と対応するよう見える。

Bragkhoglung 方言では、以上に示した例に加え、当該音節が接辞類など後続する要素を伴うときや複合語を形成するときに音対応が異なることが認められる。その異なりと蔵文との対応関係には特定の傾向があり、よく観察される事例は次の2点である。

<sup>5</sup>/ で区切っているものは自由変異ではなく、語ごとに決まったものである。すなわち対応関係が複数認められるということである。

- 末子音字が b, d, g の場合、上表で末尾に半母音を伴うものはそれが脱落し、また長母音で現れるものは調音位置を同じくする短母音として実現されるか、母音の調音位置も変わる例もまた存在する。長母音の短母音化が起きる場合、発話によっては後続の音節の初頭子音に前気音が現れる。

たとえば、<sup>ˈ</sup>tɕa: (grags) - <sup>ˈ</sup>tɕa<sup>h</sup>kə (grags ki) 「鳴く」 のようである。

- 末子音字が m, n, ng の場合、上表で末尾に ŋ を伴うかどうか、鼻母音であるか、非鼻母音であるかどうかにかかわらず、母音が鼻母音化する<sup>6</sup>。

たとえば、<sup>ˈ</sup>na: (snang) - <sup>ˈ</sup>nā gə (snang ki) 「存在する」 のようである。

これらの音対応は必ずしも規則的に現れるものではなく、上に掲げた例でも発話によって句/文中で音の交替が起きない場合もあり、初歩的な観察によると発話速度などによって変異があると見える<sup>7</sup>。ただし、共時的な記述を考えると、長母音が接尾辞の前で短母音になりうるか鼻母音になりうるかは明確にする必要があるといえるだろう。

なお、長鼻母音の例は以上の表に現れないが、蔵文対応形式を考えると、2音節が縮約したものに対応する。たとえば、以下のようである。

<sup>ˈ</sup> hā: 「めすぶた」 (phag ma)	<sup>ˈ</sup> pō: 「娘」 (bu mo)
<sup>ˈ</sup> njū: 「弟」 (nu bo)	<sup>ˈ</sup> ts <sup>h</sup> ō: 「甥」 (tsha bo)

ただし、2音節の縮約と見られる語でも、必ずしも長鼻母音になるとは限らない。たとえば、以下のようである。

<sup>ˈ</sup> na: 「太陽」 (nyi ma)	<sup>ˈ</sup> na: 「嫁」 (mna' ma)
<sup>ˈ</sup> k <sup>h</sup> a: 「雪」 (kha ba)	<sup>ˈ</sup> to: 「煙」 (du ba)

以上の例から考えると、2音節の縮約は長母音として実現されるのが基本であるが、語によって長母音が鼻母音化するというように考えられる。ただし、鼻母音化の要因は蔵文2音節目に含まれる鼻音ではないということが分かる。

<sup>6</sup>このような例は鼻母音/非鼻母音と末子音/ŋの間に対立関係が存在するのか疑わせるかもしれないが、少なくとも絶対語末では一定の形式のみが現れ、語ごとに決まっている点に留意する必要がある。

<sup>7</sup>筆者は協力者以外の Bragkhoglung 方言話者と話したことがないため、断言は避けたい。

### 3.3 声調

Bragkhoglung 方言の声調は、蔵文との対応関係の観点から考えるならば複雑であり原則を見出すのは困難である。特定の蔵文が高・低どちらの声調と関連づけられるかは、予測することができないように見える。

たとえば、声調言語である中央チベット語やカムチベット語に広く認められる蔵文と声調との対応関係に、有声音字 *g, j, d, b, dz, ʻ, zh, z* (以上阻害音) ; *ng, ny, n, m, w, y, r, l* (以上共鳴音) が先行子音を伴わない場合、通常低声調ではじまるという傾向は、3.1 に挙げた例からもわかるように、Bragkhoglung 方言にはあてはまらない。いくつかの例を再掲すると、次のようになる。

語頭が高いタイプ	語頭が低いタイプ
˘souq 「牛」 ( <i>zog</i> )	˘pi: 「子牛」 ( <i>be'u</i> )
˘tɕuq 「6」 ( <i>drug</i> )	˘tʃi <sup>h</sup> ma 「影」 ( <i>grib ma</i> )
˘na: 「森」 ( <i>nags</i> )	˘na 「魚」 ( <i>nya</i> )

また、Bragkhoglung 方言では音節末尾における高低は弁別されない。そのため、蔵文の音節末形式と Bragkhoglung 方言の声調の間には中央チベット語で認められるような関連性が認められない。

声調の起源に関する議論(声調発生論)は、従来蔵文との対応関係という視点から行われてきたが、Bragkhoglung 方言の事例はそれと異なるタイプのものではないかと推測できる<sup>8</sup>。ここでは蔵文との対応関係から見た声調について、これ以上立ち入った議論は行わない。

## 4 卓尼県の諸方言における蔵文対応形式の特徴

本節では、3節で見た Bragkhoglung 方言の蔵文との音対応(分節音のみ<sup>9</sup>)について、rNam-rgyal Tshe-brtan (2008) に言及のある Bragkhoglung 方言以外の方言資料<sup>10</sup>を中心に対照し、卓尼県の諸方言間の共通点と相違点を検討する。それに加え、

<sup>8</sup>チベット語方言の超分節音素について、その起源を蔵文との対応関係に求めるのが難しい事例を扱ったものに Suzuki (2006) がある。声調発生論については従来のものとは異なるタイプのものを設定する必要があるといえるだろう。この点の詳細については別稿に譲りたい。

<sup>9</sup>声調については、先に述べたように、蔵文との対応関係が明確ではないため扱わない。また、rNam-rgyal Tshe-brtan (2008) の資料も声調について一貫した記述が認められない。

<sup>10</sup>ただしアムドチベット語の方言と考えられる洮河北西部方言群のものは扱わない。本節で「卓尼県で話される諸方言」という言及される場合に当該方言群は含まれない。

なお、本節では Bragkhoglung 方言の卓尼県の方言例を rNam-rgyal Tshe-brtan (2008) から例を引用するが、その際原文にある表記を踏襲しつつも一部フォントを適切に変更する。同

Bragkhoglung 方言を特徴づける音対応について、そのほかのチベット語諸方言にも言及しつつ、方言の類型という観点から議論する。

本節の議論の目的はあくまでも卓尼県のチベット語方言の類型的特徴を俯瞰することであり、同方言の系統論には立ち入らない<sup>11</sup>。

## 4.1 初頭子音

### 4.1.1 閉鎖・破擦・摩擦音の有声性

卓尼県で話される諸方言については、アムドチベット語に属するものを含め、いずれも Bragkhoglung 方言と同様の条件で閉鎖・破擦・摩擦音の有声性が決まっていると考えられる。ただし、藏文有声音字に有声音が対応する例もある (rNam-rgyal Tshe-brtan 2008:31-46, 87-171)。例は割愛する。

Bragkhoglung 方言の対応関係については、多くのカムチベット語とヒャルチベット語の諸方言に共通する。ただし、卓尼県とほど近い地域で話されるヒャルチベット語 dPaskyid 方言群の諸方言では、閉鎖・破擦・摩擦音の有声性が Bragkhoglung 方言に示されるものと逆転している (鈴木(2007b) 参照) ことに注意できる。

### 4.1.2 藏文 sh, zh 対応形式

Bragkhoglung 方言では、ほぼ例外なくそり舌摩擦音 /ʂ<sup>h</sup>, ʂ, z/ として実現される。卓尼県で話される諸方言については、さまざまな対応関係が認められる。たとえば gTsangbawa 方言 (洮河東部方言群) では Bragkhoglung 方言と同様にそり舌摩擦音で対応するが、Nyinpa 方言 (洮河流域南部方言群) では軟口蓋摩擦音に対応する。Byargetshang 方言 (洮河流域沿岸部方言群) では、例によっては軟口蓋摩擦音もそり舌摩擦音も現れるようである。たとえば次のようである。

語義	藏文	Bragkhoglung	Nyinpa	Byargetshang	gTsangbawa
帽子	<i>zhwa</i>	<sup>h</sup> ʂa	xa <sup>13</sup>	za	za
肉	<i>sha</i>	<sup>h</sup> ʂa	xa <sup>53</sup>	ʂa / ʂ <sup>h</sup> a	ʂa / ʂ <sup>h</sup> a
薪	<i>shing</i>	ʂi	?	xin / ʂin	ʂin

論文から引用する方言の名称は次の通り：gTsangbawa (藏巴哇) 方言、Nyinpa (尼巴) 方言、Byargetshang (沙蓋足) 方言 (卡車郷沙蓋足村で話される方言)、Sribpa 方言 (尼巴郷石巴村で話される方言)。

<sup>11</sup>分節音の諸特徴をもってカムチベット語かヒャルチベット語かを議論することはできない。Suzuki (2008) は超分節音素の性質による分類を提案しているが、それも有効ではない事例が出てきている。最近では Tournadre (2008) のように、独立言語 (方言) を認める考え方もある。

なお、蔵文 sh, zh 対応形式がそり舌摩擦音で実現されるのは、雲南省のカムチベット語に広く見られる。卓尼県のチベット語と雲南省のカムチベット語の共通性は Suzuki (2011) および rNam-rgyal Tshe-brtan (印刷中) で指摘されている。

#### 4.1.3 蔵文 c, ch, j 対応形式

Bragkhoglung 方言では、ほぼ例外なくそり舌破擦音 /tʂʰ, tʂ, dʒ/ として実現される。卓尼県で話される諸方言については、主に 2 通りの対応関係が認められる。1 つは Bragkhoglung 方言と同様にそり舌破擦音に対応する方言で多数派を占める。もう 1 つは前部硬口蓋破擦音に対応する方言で、Nyinpa 方言にのみ認められる。たとえば次のようである。

語義	蔵文	Bragkhoglung	Nyinpa	Byargetshang	gTsangbawa
茶	ja	ʈʂa	dza <sup>13</sup>	dza	dza

なお、蔵文 c, ch, j 対応形式がそり舌破擦音で実現されるのは、前項と同じく雲南省のカムチベット語のうち Sems-kyi-nyila (香格里拉) 方言群の諸方言に広く見られる。

#### 4.1.4 蔵文足字 y 対応形式

Bragkhoglung 方言では、蔵文 Py 対応形式が前部硬口蓋摩擦音 /çʰ, ç, ʒ/ になり、蔵文 Ky 対応形式が前部硬口蓋破擦音 /tçʰ, tç, dʒ/ となる。卓尼県で話される諸方言については、大部分が Bragkhoglung 方言と同様の対応関係を見せるが、Nyinpa 方言では蔵文 sky, sgy 対応形式がそれぞれ /ç, ʒ/ となり (rNam-rgyal Tshe-brtan 2008:36-37)、摩擦音に対応する点が特徴的である。例は割愛する。

蔵文 Py 対応形式の調音点が前部硬口蓋音となるのはカムチベット語やヒャルチベット語の多くの方言と共通する。ただし、卓尼県とほど近い地域で話される Thewo (迭部/鉄布) 方言や mBrugchu (舟曲) 方言では蔵文 Py 対応形式が歯茎摩擦音になり、蔵文 Ky 対応形式が歯茎破擦音になることに注意できる<sup>12</sup>。

<sup>12</sup>Thewo 方言は東西で大きく 2 種に分かれ、それぞれの音特徴が異なるが、蔵文足字 y 対応形式については共通している。

## 4.1.5 蔵文足字 r 対応形式

Bragkhoglung 方言では、蔵文足字 r 対応形式について、その基字が何であるかによって大きく異なる対応関係を見せる。一方、rNam-rgyal Tshe-brtan (2008) は必ずしも蔵文足字 r 対応形式を体系的に掲げているわけではないため、その全体像を対照することは難しい。その中で、同書は蔵文 sr について述べているところがあるため、まずこの点についてまとめる。

Bragkhoglung 方言の蔵文 sr は無声そり舌接近音/ɾ/に対応する。それに対し、Nyinpa 方言や Byargetshang 方言ではそり舌摩擦音/s/に対応する一方、Sribpa 方言では軟口蓋摩擦音/x/に対応する。たとえば次のようである。

語義	蔵文	Bragkhoglung	Sribpa	Nyinpa	Byargetshang	gTsangbawa
豆	<i>sran ma</i>	ʼr̥ɿ ma	xɛ <sup>32</sup> ma <sup>53</sup>	ʃe <sup>32</sup> ma <sup>53</sup>	ʃe ma <sup>?</sup>	?

/ɾ, x, s/という対応関係は調音点、調音方法ともに方言間で大きく異なっているように見えるが、Bragkhoglung 方言の/ɾ/の発音時には舌背が軟口蓋方向に持ちあがる事例も認められるため、決して特異な現象ではないと見られる。これと異なり注意が必要なのが、Bragkhoglung 方言では/ɾ/と/s/は異なる音とされる（後者は蔵文 sh, zh に由来；4.1.2 参照）のに対し、たとえば Byargetshang 方言ではいずれも/s/となっている点であろう。Bragkhoglung 方言のほうがより複雑な体系を示していることになる。また、Bragkhoglung 方言はそり舌閉鎖音とそり舌摩擦音の間にも対立が認められ、前者が主に蔵文足字 r 対応形式の一部であり、後者は蔵文 c, ch, j 対応形式にあたる（4.1.3 参照）。たとえば Byargetshang 方言では、両者ともそり舌摩擦音となっている<sup>13</sup>。たとえば次のようである。

語義	蔵文	Bragkhoglung	Nyinpa	Byargetshang	gTsangbawa
6	<i>drug</i>	ʼtɕuɿ	?	tʃu	tʃu
cf. 茶	<i>ja</i>	ʼtʃa	dza <sup>13</sup>	dʒa	dʒa

Bragkhoglung 方言では、上に示したように、蔵文足字 r 対応形式は基本的にそり舌音との対応関係が認められるが、蔵文 Kr 対応形式については多くの例で前部硬口蓋摩擦音になる。このことは蔵文足字 r 対応形式が蔵文 Ky 対応形式と合流していること

<sup>13</sup>この種の異なりが方言差異であるのか音韻分析の異なりであるのかは明確ではない。しかし後者に由来する可能性が高いと考えられる。というのも、そり舌阻害音の調音様式について先行研究ではあまり注意が向けられていなかったと考えられるからである。そり舌閉鎖音とそり舌摩擦音が対立するチベット語方言は少なくなく、中でもカムチベット語 Zhollam (勺洛) 方言は独特の音声現象が認められる（鈴木 2011）。

いうことを意味する。この対応関係は Nyinpa 方言や Byargetshang 方言、gTsangbawa 方言にも見られるようである。たとえば次のようである。

語義	蔵文	Bragkhoglung	Nyinpa	Byargetshang	gTsangbawa
血	<i>khrag</i>	ʰtɕʰa htsə	tɕʰa <sup>53</sup>	tɕʰa <sup>?</sup>	tɕʰa <sup>?</sup>
髪	<i>skra</i>	ʰtɕa	?	tɕa <sup>?</sup>	tɕa
恐れる	<i>skrag</i>	ʰtɕa	tɕa <sup>54</sup>	?	?

蔵文足字 r 対応形式はチベット語諸方言の中で最も豊富な対応関係を示す例の 1 つである。卓尼県で話されるチベット語における、蔵文 Kr 対応形式が前部硬口蓋破擦音になり、それ以外の蔵文足字 r 対応形式が基本的にそり舌音になるという類型は、アムドチベット語の多くの方言と共通するものである。一方で、調音点は異なっても蔵文 Kr 対応形式と蔵文 Ky 対応形式の合流というのは、アムドチベット語のほかにも Thewo 方言や mBrugchu 方言でも認められる。なお、蔵文 Kr 対応形式が前部硬口蓋破擦音になる方言に、カムチベット語 Sems-kyi-nyila 方言群の諸方言があげられるが、同方言群の場合蔵文 Pr 対応形式もまた前部硬口蓋音になるものが多く、この点で卓尼県のチベット語とは異なる<sup>14</sup>。

#### 4.1.6 蔵文基字 l, y、足字 l 対応形式

Bragkhoglung 方言では、蔵文基字 l 対応形式には /l/ が、基字 y 対応形式には /j/ が、足字 l 対応形式は sl, zl を除き /l/ が当たる。蔵文 sl, zl はそれぞれ歯茎破擦音 /ts, dz/ になる。この対応関係は卓尼県のチベット語の中で共通する。たとえば以下のようにある。

語義	蔵文	Bragkhoglung	Nyinpa	Byargetshang	gTsangbawa
年	<i>lo</i>	ʰlo htsi:	?	lo	lo
月	<i>zla ba</i>	ʰfi dza:	?	dza:	dza wa

この対応関係については、多くのカムチベット語とヒャルチベット語の諸方言に共通する。ところが、卓尼県とほど近い地域で話されるヒャルチベット語 Khodpokhog (九寨溝) 方言群の諸方言では、蔵文 l 対応形式が /j/ で蔵文 y 対応形式が /z/ になっている点 (Suzuki 2009) に注意できる。

<sup>14</sup>この対応関係について、Suzuki (2011) は卓尼県のチベット語をカムチベット語 Sems-kyi-nyila 方言群と密接に関連づけることのできない音変化の体系上の重要な差異と指摘している。

## 4.1.7 蔵文 lh 対応形式

Bragkhoglung 方言では、蔵文 lh 対応形式が前気音を含む/l/になる。これは Byargetshang 方言でも近似した対応関係を見せ、たとえば<sup>53</sup>「神」(lha)などがある。

この対応関係については、カムチベット語とヒャルチベット語の諸方言の多くが無声歯茎流音/l/となるのに対して<sup>15</sup>独特であるといえる。なお、Bragkhoglung 方言では少数例に/l/を含むものがあり、/l/と対立を形成している。この点もまた Bragkhoglung 方言に独自の特徴といえる。

## 4.1.8 蔵文鼻音字および s+鼻音字を含む形式

Bragkhoglung 方言では、蔵文 ny 対応形式が蔵文 n 対応形式と同じく/n/になっている点が特徴的である。卓尼県のチベット語の中では gTsangbawa 方言とよく一致する。Byargetshang 方言の場合、音声的に [n] と [ŋ] の間でゆれがあるが、両者が弁別されないことが注目に値する。Nyinpa 方言では蔵文 ny 対応形式に/ŋ/があたるが、蔵文 n が/ŋ/と発音されることもあるようだ (rNam-rgyal Tshe-brtan 2008:41)。たとえば以下のようなようである。

語義	蔵文	Bragkhoglung	Nyinpa	Byargetshang	gTsangbawa
魚	<i>nya</i>	ʼna	ŋa	ŋa <sup>?</sup> (na)	na
小麦	<i>nas</i>	ʼna:	?	ŋei	næ

Bragkhoglung 方言のような蔵文 ny, n の/n/への合流という対応関係は、チベット語方言学上きわめてまれな類型といえ、同様の音対応を見せるのはミャンマーで話されるカムチベット語 Sangdam 方言のみである (鈴木 2012)。

一方蔵文 s+鼻音字を含む形式は卓尼県のチベット語の中では基本的に有声鼻音で実現される (Nyinpa 方言の事例は不明)。たとえば次のようである。

語義	蔵文	Bragkhoglung	Nyinpa	Byargetshang	gTsangbawa
竹	<i>smyug ma</i>	<sup>-h</sup> nə ma	?	ŋi waj	nu ma

Bragkhoglung 方言の場合無声前気音が先行するのが通例である。この特徴は多くのヒャルチベット語と一致する。

<sup>15</sup>多くの中国の研究者はさまざまなチベット語方言に/l/という音素を認めているが、それは通常 [l] を表そうとしているものと理解される (張濟川 2009:278-282)。筆者による実際の音声観察と比べても、チベット語方言の先行研究に書かれている/l/は多くの場合 [l] を表していると理解できる。



#### 4.1.9 前鼻音を含む子音連続

Bragkhoglung 方言では、前鼻音は藏文前接字 *m* または *'* に対応して、有声阻害音および無声有気阻害音に先行できる。他の卓尼県のチベット語の中では必ずしも藏文前接字 *m* または *'* に対応して前鼻音が現れるわけではない。特に無声有気阻害音には先行しないと見られる<sup>16</sup>。たとえば次のようである。

語義	藏文	Bragkhoglung	Nyinpa	Byargetshang	gTsangbawa
虫	'bu	<sup>h</sup> mbuu	?	mbəʔ	mbə y je
唇	mchu tu	<sup>h</sup> tʂʰuu <sup>h</sup> tə	?	tʂʰə to	tʂʰə təu

#### 4.1.10 そのほかの特徴

まず、Bragkhoglung 方言で藏文 *ph* 対応形式が無声声門摩擦音/h/に対応するという現象についてみると、Byargetshang 方言および gTsangbawa 方言では両唇閉鎖音/pʰ/に対応する。この点で、今手元にある資料の中では、Bragkhoglung 方言のみがこの対応関係を見せるということになる。藏文 *ph* に/h/が対応するという事例は多くのアムドチベット語に認められる現象であり、そこに共通点がある。

藏文 *w* 対応形式については、「狐」の例について、次のようになる。

語義	藏文	Bragkhoglung	Nyinpa	Byargetshang	gTsangbawa
狐	wa	<sup>w</sup> va / <sup>h</sup> wa	?	waʔ	va

Bragkhoglung 方言の対応関係はいずれも卓尼県のチベット語の中に認められる。他のチベット語諸方言の事例を見ると、/w/で実現される方言は少ない。また、卓尼県周辺のアムドチベット語では有声口蓋垂摩擦音/b/で実現されるという点に注意が必要かもしれない。

## 4.2 母音および母音+末子音

母音および母音+末子音形式は、筆者のものと先行研究のもので分析の仕方が大きく異なっており、分析の方法や基準を同じくしないものを簡単に対照することはできない。その中で、特に目につく特徴について1つあげておく。それは方言によって現れる末子音に大きな差があるということである。Bragkhoglung 方言では、末子音は/ŋ, w, j uq/を認めることができるが、Byargetshang 方言では/k, n, ŋ, r, ʔ/が末子音

<sup>16</sup>例外的に Byargetshang 方言で <sup>h</sup>nte<sup>h</sup>oŋ 「鳳」(khyung) のような例が見られる。

として現れることができるようである。一方 gTsangbawa 方言では /n, ŋ, ʔ/ にとどまるようである。

卓尼県という限定された地域の中でこのような多様性が認められるのは、チベット方言学的に見てまれな状況にあるといえる。また、カムチベット語やヒャルチベット語の諸方言と照らし合わせて、Bragkhoglung 方言に認められる最も特徴的な現象は、末子音に声門閉鎖音 /ʔ/ を持たないことである。このような方言はきわめて少ない。

### 4.3 2音節の縮約

Bragkhoglung 方言では特定の語において、蔵文で2音節であるものが1音節として実現する。このような現象は、卓尼県のチベット語の中では Byargetshang 方言に比較的多く認められる。たとえば poj 「娘」(*bu mo*) や ka: 「柱」(*ka ba*) などがあげられる。また、Sribpa 方言では nəoŋ<sup>42</sup> 「太陽」(*nyi ma*) などがある。

2音節の縮約という現象は、四川省甘孜州南端部から雲南省にかけて分布するカムチベット語に特によく認められる（鈴木 (2007a, forthcoming) 参照）。

### 4.4 蔵文対応形式についてのまとめ

本節で扱った蔵文対応形式の卓尼県のチベット語諸方言間における共通点と相違点を簡潔にまとめると、以下のようになる。

- 閉鎖・破擦・摩擦音の有声性に関する蔵文との対応関係および蔵文足字 y, 共鳴音字 (ny 除く) 対応形式、有声音字に先行する前鼻音を伴う形式については、基本的に卓尼県のチベット語諸方言間で一致する。
- 蔵文 sh, zh, c, ch, j, ny 対応形式については、主に Nyinpa 方言と Bragkhoglung 方言を含むその他の方言の間に相違が見られる。
- 蔵文足字 r 対応形式については、蔵文 sr の組み合わせの対応関係が方言ごとに異なるほかは、卓尼県のチベット語諸方言間で調音点について近似の対応関係を見せる。
- Bragkhoglung 方言のみに見られる特徴に、蔵文足字 r 対応形式・蔵文 lh 対応形式・蔵文 s+鼻音字を含む形式・無声有気音字に先行する前鼻音を伴う形式・末子音に閉鎖音を伴わない点がある<sup>17</sup>。

<sup>17</sup>これは方言特徴と言うべきか音声観察/分析の異なりと言うべきか、現段階でははっきりしない。

## 5 まとめ

本稿では卓尼県扎古録鎮で話されるチベット語 Bragkhoglung 方言の蔵文との対応関係を明らかにし、その類型的特徴を議論した。Bragkhoglung 方言に際立つ特徴として、蔵文 Pr, Tr に対応するそり舌閉鎖音系列と蔵文 c, ch, j に対応するそり舌破擦音系列の対立、蔵文 sh, zh に対応するそり舌摩擦音と蔵文 sr に対応する無声そり舌共鳴音の対立、蔵文 lh に対応する歯茎側面摩擦音と蔵文対応関係が不明の無声歯茎流音の対立、前部硬口蓋鼻音が歯茎鼻音に合流している点、末子音に閉鎖音類が現れない点などを挙げることができる。

卓尼県のチベット語を扱う rNam-rgyal Tshe-brtan (2008) に記述されている資料をもとに考えると、Bragkhoglung 方言が属するとされる洮河流域南部方言群に含まれている Nyinpa 方言が卓尼県の中でも独特の音対応を見せていることから、方言の低位区分としてこれら両者を同じ群にまとめる必要性は認められないと考える。これからも継続した方言調査が必要となるところである。

## 参考文献

- 鈴木博之 (2005) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1-23
- (2007a) 「甘孜州郷城県カムチベット語の方言特徴」『ニダバ』第 36 号 17-26
- (2007b) 「チベット語包座 [Babzo] 方言の音声分析とその方言特徴」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 74 号 101-120
- (2011) 〈嘎嘎塘藏語的咽化元音與其來源〉《語言暨語言學》第 12.2 期 477-500
- (2012) 「カムチベット語 Sangdam 方言の音声分析とその方言特徴」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 83 号 37-58
- (forthcoming) 「カムチベット語雲嶺・查里通 [Tsharethong] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 7 号
- 西義郎 (1986) 「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11 巻 4 号 837-900 + 1 地図
- 西田龍雄 (1987) 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108-169 冬樹社
- rNam-rgyal Tshe-brtan (2008) *Co-ne'i bod-skad-la dpyad-pa*. (《藏語卓尼話研究》) 中央民族大学碩士論文

- (印刷中) Co-ne dang Zung-chu rGyal-thang gsum-gyi bod-skad-las 'phros-pa'i gtam. 《安多研究》
- Suzuki, Hiroyuki (2005) Einige Bemerkungen über den Ursprung des creaky Tons im Tibetischen von Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou]. *Kyoto University Linguistic Research* 24, 45-57
- (2008) Nouveau regard sur les dialectes tibétains à l'est d'Aba : phonétique et classification du dialecte de Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou]. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 31.1, 85-108
- (2009) Tibetan dialects spoken in Shar khog and Khod po khog. In *EAST and WEST* Vol. 59: 1-4 / Samten G. Karmay & Donatella Rossi (eds.) *Bon: the Everlasting Religion of Tibet — Tibetan Studies in Honour of Professor David L. Snellgrove*, 273-283, IsIAO
- (2011) *Similarity and difference between rGyalthang Tibetan and Cone Tibetan — How to discuss the dialectal proximity in the Tibetan dialectology* —, paper presented at Workshop on Comparing Approaches to Measuring Linguistic Differences (Göteborg)
- Tournadre, Nicolas (2008) Arguments against the concept of 'conjunct' / 'disjunct' in Tibetan. In Brigitte Huber et al. (hrbg.) *Chomolangma, Demawend und Kasbek, Festschrift für Roland Bielmeier zu seinem 65. Geburtstag*, 281-308, International Institute for Tibetan and Buddhist Studies GmbH
- Zhang, Jichuan (1996) A sketch of Tibetan dialectology in China: Classifications of Tibetan dialects. *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25 (1), 115-133
- 江荻 (2002) 《藏語語音史研究》民族出版社
- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med] · 格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》民族出版社
- (2004) 《實用藏文文法教程 [修訂本]》四川民族出版社
- 瞿靄堂 (1962) 〈卓尼藏語的聲調與聲韻母的關係〉《中國語文》331-339
- (1991) 《藏語韻母研究》青海民族出版社
- (1995) 《藏族的語言和文字》中國藏學出版社
- 張濟川 (2009) 《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》社會科學文獻出版社

### [付記]

Bragkhoglung 方言の調査にあたっては、瑪吉阿米北京新店の関係各位の協力を得た。また、重要文献を入手するのに友人である供邱澤仁さんの手を煩わせた。ここに記して感謝の意を表する。

加えて、改稿期間において本稿で言及した卓尼県出身の研究者 rNam-rgyal Tshe-brtan さんに直接会うことができ、貴重なコメントをいただいた。また、筆者の録音した Bragkhoglung 方言を聞いてもらい、それが「文語チベット語の影響をほとんど受けていない土地のことば」であるとの確認を得た。

## 付録：卓尼県の地図

以下の地図は Google Maps から抽出したものである。地図内の地名の表記が簡体字になっているほか、一部古い情報で表示されている。

図 1：甘肅省南部と卓尼県の位置（印は卓尼県城柳林鎮）



図 2：卓尼県の各郷鎮（印は Bragkhoglung 方言の話される扎古録鎮）



なお、藏巴哇郷は右上方 Earth の位置にある。

**À propos des dialectes tibétains parlés à Cone, Gansu**  
—particularité du dialecte de Bragkhoglung comparé à la forme du tibétain écrit—

Hiroyuki SUZUKI

**résumé**

Les dialectes du tibétain parlés dans le district de Zhuoni [Co-ne], préfecture de Gannan, province de Gansu en Chine, sont remarquables par leurs différences avec les dialectes d'Amdo. Cet article essaie de décrire des correspondances sonores entre le tibétain écrit et la variété de Zhagulu [Brag-khog-lung] et de comparer cette particularité dialectale avec d'autres variétés de Cone qui ont été décrites dans rNam-rgyal Tshe-brtan (2008).

Le dialecte de Bragkhoglung se caractérise par les traits suivants : la distinction entre l'affriquée et l'occlusive rétroflexe (provenant de *c*, *ch*, *j* et *Pr*, *Tr* respectivement), celle entre /ʂ/ et /ʈ/ (provenant de *sh*, *zh* et *sr* respectivement), l'affriquée prépalatale qui correspond à *Kr* ; la convergence du son correspondant à *n* et *ny*, et l'absence d'occlusive glottale en position finale.

En comparaison des cas d'autres dialectes de Cone, on constate que le dialecte de Bragkhoglung n'est pas typologiquement similaire à celui de Nyinpa, que rNam-rgyal Tshe-brtan (2008) classifie dans le même groupe auquel appartient le dialecte de Bragkhoglung, donc cet article montre qu'il faut reconsidérer la classification de ce groupe dialectal.

受領日 2012年4月7日  
受理日 2012年7月12日